

引越し、ご挨拶

河崎 啓一

降って湧くような話、運営会社のご事情で入居している老人ホームを移ることになった。「引越しするよ」「えっ、またあ」電話口の向こうで叫んでいるのは、私の処女出版を企画し、完成に走り回っている気鋭の女性編集者である。

「もう、25回目でしょう」「そうなるなあ、よく数えたね。」相棒の男性編集者が、私の取材を年表にまとめてくれたという。

父親の転勤から私の転勤、その他あれこれで、90歳の今日まで、25回も家移りしたのだ。浮き草の運命と、とうに諦めてはいたのもののこの期になんで老人ホームまでとは。そんなことで鎌倉市から東京都府中市に越します。

市役所で手続きをした。一行、たった一名の転居届。妻と二人転入し、市内の観光施設が全てが無料となる「福寿手帳」を受け取って、顔を見合わせて笑った遠い日を思い出し、ちょっと泣いた。八年間、四季折々を過ごしたこの施設での生活も残り少なくなった。ちょっと感傷的になりながら廊下を歩いていたら、事務室のケアマネージャーさんに呼びとめられた。明朗、元気印の女性である。

「桜ヶ丘、から問合せがあるの」「桜ヶ丘」は今度私が移り住むホームの呼び名である。「はあ、何でしょう」「食べ物に好き嫌いある?」「いや、ないです。納豆は小粒より大粒の方がいいけど」「アレルギーは?」「ありません」入居前から何かと気を配ってくれているのだと思うと、ちょっと嬉しくなった。「それだけですか」「それだけです」そこで、ちょっと口が滑った。「女ぐせとか...」これは失敗だった。美しいケアマネさんはジャというような声を残して引込んでしまった。「あら、まあ、何と答えましょう」とでも受けてもらったら、「フツウ」と答えようと思っていた。

さて、湘現会のことです。平成十七年、かねて親しくしていただいていた、現顧問の堀井さんのお誘いをうけて入会いたしました。爾来十五年、ハーモニカ、カラオケ、笑考快議処、鍋、イタリアン、青春切符....。抱え切れぬほどの思い出をいただきました。令和になっての新年会も素敵でした。男女が手をつなぎ、輪になって踊る、生涯現役青春、湘現会の理念を象徴するような光景でした。

ちょっとお断りの言葉があったようですが、次は、もう一枚殻を破って、大いにハグりましょう。和加子さん唯雪さん期待しています。

最後に二月からの新住所を記しておきます。おたより下さい。生来の風来坊。どこで果てよと風まかせ、と強がってみても、本心は淋しいのです。一人寝のベットの枕で結ぶ、湘現会の青春の夢が恋しいのです。

(編集注 住所は2020年2月9日発行「さらなる一歩」に掲載しています)